小中学生の同性友人関係に関する検討

—同性友人グループにおける活動と動機づけの観点から—
○八越 忍¹・新井邦二郎²・濱口佳和¹
(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科・²東京成徳大学)
キーワード: 同性友人関係, 活動的側面, 動機づけ

Same-sex friendship in elementary school children and junior high school students
Shinobu YAKOSHI¹, Kunijiro ARAI² and Yoshikazu HAMAGUCHI¹
(¹Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, ²Tokyo Seitoku University)
Key words: same-sex friendship, activity, motivation

目 的

親密な友人関係の形成は前青年期における発達課題であり (Sullivan, 1953), 青年にとって友人関係は重要な意味を持つと考えられている。保坂・岡村 (1986) は, 青年期の友人関係の発達段階として, gang-group, chum-group, peer-group の3段階の位相を示している。小学校高学年では gang-group, 中学生では chum-group が中心となることから, 10歳前後における同性同輩集団の出現が指摘されている。また, 青年期の友人関係には顕著な男女差があることも指摘されており (榎本, 1999; 落合・佐藤, 1996), 女子は「グループ」と呼ばれる小集団で行動する傾向にあることが知られている。そこで本研究では, 小学校高学年から中学生における同性友人関係の男女差を明らかにすることを目的とする。同性の特定のメンバーで構成される「同性友人グループ」に焦点を当て, 活動と動機づけの2側面から検討する。

方 法

調査対象者: 大学生 188 名 (男性 100 名, 女性 88 名, 平均年齢 19.96±1.12 歳)。
調査時期および調査手続き: 調査の実施時期は 2009 年 5 月。個別配布個別回収形式で実施された。
調査内容: 小学校高学年から中学生時を回想してもらい回答を求めた。①同性友人グループ所属経験の有無: 小学校高学年から中学生時に同性友人グループに所属していたかを 2 件法 (「はい」「いいえ」) で尋ねた。「はい」と回答した者に②, ③への回答を求めた。②同性友人グループでの活動: 榎本 (1999), 星名 (2000) から 27 項目を選択した。「あなたは, そのグループでどのようなことをしましたか?」という質問に対し, 各項目の活動について「とてもよくした」から「まったくしなかった」の 6 件法で回答を求めた。③動機づけ: 岡田 (2005) の友人関係への動機づけ尺度 (16 項目 5 件法) を用いた。「外的」「取り入れ」「同一化」「内発」の 4 因子。

結 果

小学校高学年から中学生時に同性友人グループに所属していたと回答した 175 名 (男性 91 名, 女性 84 名, 平均年齢 19.97±1.11 歳) の回答を対象に分析を行った。同性友人グループでの活動に関する 27 項目に対して因子分析 (主因子法・バリマックス回転) を行った。固有値の変化から 5 因子解を適当と判断し, 因子負荷量が .35 以下の 2 項目を除いた 25 項目で再度因子分析を行った。友人関係の「活動的側面」 (榎本, 1999) を参考にして, 第 1 因子 9 項目を「相互理解」因子, 第 2 因子 8 項目を「余暇の共有」因子, 第 3 因子 2 項目を「秘密の共有」因子, 第 4 因子 3 項目を「時間の共有」因子, 第 5 因子 3 項目を「親密確認」因子とした。男女別に同性友人グループでの活動に関する尺度得点を算出し, 平均値の差の検定を行った。その結果, すべての下位尺

度において有意な差が見られた (相互理解: $t(171)=-2.47, p<.05$, 余暇の共有: $t(171)=4.61, p<.001$, 秘密の共有: $t(106.06)=-15.92, p<.001$, 時間の共有: $t(156.65)=-2.80, p<.01$, 親密確認: $t(171)=-4.54, p<.001$)。相互理解, 秘密の共有, 時間の共有, 親密確認の得点は女性の方が高く, 余暇の共有の得点は男性の方が高かった。動機づけの下位尺度と同性友人グループでの活動との相関係数を男女別に算出した (Table 1, Table 2)。その結果, 男女ともに同一化と相互理解, 余暇の共有, 時間の共有との間, 内発と相互理解, 親密確認との間に正の相関が見られた。また男性においては, 外的と秘密の共有, 時間の共有との間, 取り入れと秘密の共有との間, 内発と余暇の共有との間に正の相関が見られ, 内発と秘密の共有との間に負の相関が見られた。さらに女性においては, 内発と時間の共有との間に正の相関が見られた。

考 察

同性友人グループでの活動について, 友人と遊ぶことを中心とした「余暇の共有」は男性の方が多く, お互いの考えや悩みなどを話し合う「相互理解」, 親密性を確認することを重視した「秘密の共有」, 「時間の共有」, 「親密確認」は女性の方が多く見られた。男性友人関係は手段的であり, 女性同性友人関係は情動的であると指摘されている (和田, 1993)。本研究の結果から, 同性友人グループにおいても従来の研究と同様の男女差が示されたと考えられる。動機づけについて, 自己決定理論 (Ryan & Deci, 2000) では, 自己決定性の程度から, 外的, 取り入れ, 同一化, 内発の 4 つの動機づけが一次元上に位置づけられている。男女ともに同一化や内発といった自己決定的な動機づけが活動の多側面と関連していた。親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデル (岡田, 2008) から, グループでの活動は, 友人関係は重要である, 友人と一緒にいるのは楽しいなどの理由によって促されると考えられる。今後は, 動機づけへの影響段階, 適応への影響段階についても検討する必要がある。

Table 1 動機づけと同性友人グループでの活動との相関(男性)

	相互理解	余暇の共有	秘密の共有	時間の共有	親密確認
外的	.06	.20	.41 ***	.24 *	.15
取り入れ	.02	.17	.24 *	.11	.19
同一化	.54 ***	.43 ***	-.02	.29 **	.12
内発	.42 ***	.47 ***	-.36 **	.06	.37 ***

*** $p<.001$, ** $p<.01$, $p<.05$

Table 2 動機づけと同性友人グループでの活動との相関(女性)

	相互理解	余暇の共有	秘密の共有	時間の共有	親密確認
外的	.03	.21	.11	-.04	.11
取り入れ	-.14	.07	-.04	-.06	.18
同一化	.34 **	.39 ***	-.04	.28 **	.16
内発	.34 **	.18	-.21	.28 *	.34 **

*** $p<.001$, ** $p<.01$, $p<.05$